

10周年に思うこと

日赤図書室協議会会長

(高山赤十字病院院長)

松下 捷彦

すべては患者さんのために、すべては良好な医療環境構築のために、どうぞよろしくお願ひいたします。

今年の総会の会長メッセージはこんな言葉で締めくくりました。

実は、私達のような田舎の病院でも、インターネットから引き出した俄仕込みの知識をふりかざして「私の治療はガイドラインに則って行われていますか?」という患者さんが、ときに現れるという時代です。

当院ではこんな話題が新鮮な驚きをもって、医局の話題になる程度ですが、大都会では日常の光景かもしれません。「俄仕込みの知識をふりかざして」という表現(これは私の書いたものですが)は、パターンリズムに毒された云い回しで、自分の不勉強を棚に上げて「つべこべ云わないで医者任せればいいのに、こうるさい患者ダナ」と考えている向きが、まだまだ少なからず存在することを示しているとも云えそうです。

でも、パターンリズムに密かな憧憬も感じながら、それは心中深くに押し隠して「患者本位の医療」の旗を振る立場にある者としては、患者主体の医療の前提として「患者さんやその周囲が、インターネットや図書検索などを通じて現疾患について知識を深めたい」と願っていることを応援する手立てを考えることも大切です。

現今の病院図書館が、その機能を担うことを

期待する論調も見かけますし、それはもっともなご意見です。でも、と pessimistic な方向へ議論は向かいます。

この国の国民皆保険制度は、世界に冠たる制度で平和憲法に勝る神々しい輝きを放っています。

その施行当初から低医療費政策ということが言われていましたが、現在ではそれに輪をかけた医療費抑制策なる政策がハバを利かせています。

そんなわけで、病院図書館を患者さんにも開放し学習の場を提供するようにグレードアップすることへの経済的バックアップが、このがんじがらめの抑制的統制経済の中で不可能なものに思えてしまうのです。

Informed Consent を医療の中心にすえるという施策を、ほんとうに展開する気があるのなら、病院図書館の充実や患者さんへの開放に向けて、政策的援助が望まれます。

余談になりますが Informed Consent が100%実践されていると感じている医師は一人もいません。外来の3分診療は改善の傾向が顕著とはいえませんし、Dr.たち自身、超大多忙で家庭を「無医地区・母子家庭」にして頑張っています(「母子家庭」は女医さんが増えている中では差別的表現で穏当を欠きますが……)。

創立10周年を迎えたというのに、会長の書くことは、相も変らぬ泣き言ばかりで申し訳ございません。

病院図書館の充実・発展と、みなさんのご健勝にての、ご活躍を祈念して擱筆します。

* * * * *

日赤図書館協議会発足 10 周年 によせて

日本赤十字社医療事業局長
山田 史

このたび、日赤図書館協議会が発足 10 周年を迎えられますことを心からお祝い申し上げます。病院の中では地味な部門ですが、会員の皆様には、日頃から病院業務を熱心に支えていただき大変有難うございます。

日本赤十字社は平成 14 年に、創立 125 周年・社法制定 50 周年という節目の年を迎えました。これを契機に赤十字事業に携わるすべての職員が、赤十字の使命を改めて認識し、人道的任務の遂行にあたらなければならないと考えております。赤十字全体としては、社員制度・社費制度という社の根幹に関わる問題の再検討などを行っています。赤十字病院にも色々な波が押し寄せてきています。公的病院として赤十字病院は他の病院とどこが違うのか、赤十字病院はどうあるべきなのかなど、もう一度見直す必要があり、検討を続けています。

さて、病院の図書室を取り巻く環境も大きく変化していますが、最大の課題は IT 化の波とどう取り組むかでしょう。市井の図書館には電子図書館構想が始まり、単に本の貸し出しにとどまらない新しいサービスに取り組んでいます。データの量からはインターネットには勝てませんが、インターネットを利用する部分と、雑誌・単行本などの物の部分とをどのように組み合わせていくかが問題です。病院の規模、医師・看護師を始めとする病院職員の臨床・研究での利用度、患者図書室としての利用のされ方など当

然機能が違ってこなければなりません、最近はどうも無機的で暖か味の少ない図書室が増えているのではないかと気になります。もちろん病院の限られた面積の中で、図書室に広いスペースを割くことは中々難しいとは思いますが、図書室本来の静かに本を読む環境を整えることは、職員の癒しの面からも、患者のアメニティの面からも必要なのではないのでしょうか。ただ平成 14 年度の病院の財政は診療報酬改定の影響で、病院全体として 9 期振りの赤字決算でした。現在の医療行政の方向から、病院の経営状況が大きく好転することは考えにくいので、今後生産性のない部分の予算は削減されていく可能性があり、図書室としても予断を許せません。理想の図書室としての将来像が中々見えにくいのが現状だと思いますが、最小限の費用で効率の良い図書室運営を図っていくことに会員の皆さんの知恵をしばっていただくようお願いいたします。

最後に、日赤図書館協議会の益々のご発展とご活躍を祈念して、設立 10 周年によせる挨拶といたします。

設立当時の思いで

前名古屋第一赤十字病院図書室
笠原 廣子

設立 10 年を迎え、設立にかかわった者として当時の事を話してほしいとのこと、久しぶりに懐かしく振り返ってみました。

私は 1984 (S59) 年 4 月に図書室勤務となりました。近畿病院図書室協議会・病院図書室研究会に参加し、赤十字病院の方々の活躍に目を見張り、一方自分の職場の図書室が雑誌目録

すらないのに愕然としました。また、当時パソコン・オンラインの導入等が常識となりつつありましたが、どこの病院でも一人勤務の図書室では、仕事の内容を上司・管理者に理解してもらうのは困難な状況で、ハードの面での整備は遅れていました。また製薬会社のMRによる文献複写サービスの自粛により図書室に文献複写依頼が殺到するなど、図書室を取り巻く状況が急速に変化し、図書室担当者の資質が問われることになりました。

全国組織を持つ赤十字病院で相互研修ができれば、院内でより理解されるのではないかとの思いから、長年の夢であった赤十字ネットワークを、平成6年、泉谷（大阪）、飯田（浜松）、木下（高山）、笠原（第一日赤）が発起人となり設立しました。赤十字ではすでに本社の承認を得て各種職能団体が研修会・会報の発行を行っており、「日赤ライブラリアンの会」も職能団体として本社承認を受けるよう働きかけました。この時期、本社から「病院運営に関する戦略」が示され、この会が目指す資料の共有化がこの方針と合致したことも幸し、本社で「現行医学雑誌目録1996」を発行して頂けました。

（これには会が発行した「現行医学雑誌目録1995」や「内・外医学雑誌総合目録本社衛生部図書館編 S30 年発行〔高山日赤所蔵〕」又、名古屋第一日赤で行ったアンケート調査で、

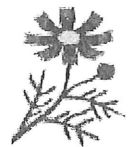
「54 病院中 40 病院が日赤ネットワークを必要」と回答した資料が大いに役立ったと思います。）

平成8年8月には本社の認める団体として研修会・総会を本社第2会議室で開催する事が出来ました。この総会に至るまでには本社医療事業部企画課に企画書、会則、現状報告などの説明の為、世話人が本社を訪問し必要書類を提出したりしました。このことは木下、飯田さんお2人の力があってこそ出来たことと思っています。

平成6年に有志10名でスタートした会が既に10年が経過し現在では大変活発に活動しているようであり、当初ネットワーク作りを進めた者の一人として大変喜んでます。

現在では、医療情報の提供のあり方が急速に変化し、院内特に専門職の職員だけの図書室ではなく、医師と患者が共に患者の疾病に関する情報を共有する為の情報を提供する場所として期待されています。担当者はますます高度な知識と資質が求められます。ネットワークの研修会に参加し、他施設との交流によって図書室の質の向上をはからねばなりません。

今後、病院図書室が院内外から高い評価を受けることを願っています。



日赤図書館協議会の現状と課題

事務局：飯田 育子（浜松日赤）

日赤図書館協議会（以下、当会）の活動は、1994年に有志の呼びかけから始まり、今年で設立10周年を迎えた。10年間の主な活動は別表にまとめてある。ここでは、事務局の立場から見た現状と今後の課題について述べる。

I. 職能団体と会員

当会は、日本赤十字社（以下、本社）から職能団体として承認され、活動を続けている。他の職能団体では、会員が基礎となる資格を持ち、さらに認定制度や専門制度により、専門化が一層進んでいるが、当会では、まだすべての会員が司書有資格者ではない。大学の通信教育でも司書資格の取得が可能であり、会員への資格取得推進活動を勧めていきたい。

会員数は現在56名である。昨年大幅に増加したが、これは病院機能評価受審の影響であると考える。会員の増加は喜ばしいが、当会の発展には結びついていないようである。活動を進展するためには、会員がもっと積極的に活動することが必要であると思う。

II. 幹事、協力役員

数年前から、事業を遂行していく上で、幹事の負担が重くなってきた。幹事や協力役員は、時間外に当会の仕事をこなしているが、あまりに作業量が多いと、幹事の引き受け手がいなくなってしまう。新旧交代していくことが組織の活性化につながるため、できるだけ多くの会員

に作業の分担をお願いしたい。業務マニュアルを作り、引き継ぎしやすくすることも大切である。外注できるものは、積極的に委託することも考慮したい。また、幹事会出席の交通費補助（5,000円）等も、もう少し増やすべきであると思っている。

III. 広報と対外交流

8月に、当会のホームページが担当幹事の尽力で開設された。今後広報手段として、大きな役割を果たすであろう。現在、他の病院図書館ネットワークと、会報の交換や公開講座により対外交流を行っている。他のネットワークと交流機会を持つことは大切であると考え。

IV. 資料の共同購入

日赤のスケールメリットを生かした共同購入を、本社で奨励している。当会でも、資料の共同購入の可能性を積極的に検討していきたい。

V. 会計

3,500円の年会費を、今年度4,500円に値上げした。これにより作業の外注や新規事業を検討したい。昨年まで研修会開催に利用していた本社会議室が、今年から有料化されたため、今年度は、急遽医療センターで開催することになった。会員の意見を聞き、今後本社で開催する場合は参加費の値上げも検討するなど、健全な事業運営のため、余裕を持った財政状態を維持して行きたいと考えている。

VI. 事務局業務

本社との交渉、会長への連絡、事業間、担当者間の調整と補助、他のネットワークとの渉外・調整、広報（出版物等で当会を紹介、会報の販売促進、公開講座への勧誘）などを事務局が担当している。今後、渉外については一層強

化する必要があると思う。

病院を巡る動きが慌ただしく、また経営環境も厳しい中、図書室担当者には一層のレベルアップが求められている。当会は職能団体であり、会員が情報提供のエキスパートとして、病院図書室活動の充実と赤十字事業の発展に貢献できるように、援助しなければならないと思う。そのため会員の方々には、当会の事業に積極的に参加し、より充実した活動ができるように協力していただけることを切望している。

「日赤ライブラリアンニュース」 から「日赤図書館雑誌」への変遷

編集部誌編集係：天野いづみ（静岡日赤）
木下久美子（高山日赤）

平成6年9月発行の「日赤ライブラリアンニュース」第1巻第1号には、この会の発起人である、笠原（前名一）、木下（高山）、飯田（浜松）の挨拶から始まり、「第1回日赤ライブラリアンの会報告」が掲載されている。平成6年7月9日に大阪にて、10名の参加で開催されており、参加者には、上野（長野）、花北（姫路）、山田（鳥取）、七浦（原：大津）、浜口（高槻）、森脇（松江）らの懐かしい名前が見られる。今日の会の活動は、これらの方々の力によるものが大きい。

第2巻からは、浜口氏（高槻・元図書室）と原氏（大津：元図書室）、天野が編集を行った。第7巻第2号まで（通巻12号）の12冊は、まさしく手作りの会報であるが、内容も日常業

務の個々の問題点が親しみ易く表現されており、浜口氏の編集長としての力と当時の苦労が思い出される。

さて、現在の「日赤図書館雑誌」という立派な体裁になってから今版で3冊目であるが、内容はレベルアップしたであろうか。まず、ISSN番号を取得し、国立国会図書館に送付、また日赤独自のトピックスを掲載するよう努めている。表紙のデザイン・イラストは、現役東京芸術大学の学生に依頼しており、他誌とは違った趣の表紙となっている。そして、経費削減のため、編集部でレイアウト、ゲラ刷りまでを行い、印刷・製本を業者に依頼している。前号からは、広告募集をして、広告料が入ることとなった。印刷部数は、200冊。日赤の会員だけでなく、PRのために非会員にも送付している。雑誌を見て、少しでも仕事に役立てていただきたい。また非会員の入会にも役に立てればと思う。

「日赤図書館雑誌」の現在の編集は、木下・天野の2人で、編集企画・原稿依頼、原稿整理・レイアウト・ゲラ刷り・校正・発送・他雑務をしている。しかし、とうてい手が回らないため、校正等には他幹事の協力を得ている。

第1号の編集後記に、「継続は力成り」と飯田が述べているが、今後、20周年、30周年と活動が盛んになり、より多くの読者を抱える雑誌になることができるのだろうか。現在の弱小編集部では難しいように思われる。そこで、より多くの会員に、編集作業に協力していただけるのを願っている。

今後も、会員間のコミュニケーションの場となる雑誌、また仕事に必要な知識・技術を提供できる雑誌を目指したい。

研修部：10年のあゆみ

研修部：鳥淵早希子（和歌山医セ）
塚越 貴子（前橋日赤）

研修部は、研修会の開催を通じて、会員図書室の充実と向上に努めている。10周年を記念し、これまでの活動を報告する。

I. 研修内容について

研修会は、原則的には基礎講座（実務講座）、事例報告、公開講座等で構成する。基礎講座は、日常業務において必要な基本的知識や技術を学ぶ場である。事例報告では、会員が日常業務や活動の報告をして、終了後、参加者とのディスカッションを通じて情報交換を行う。第6回からは公開講座を設けることとなり、2日間の研修のうち1日を会員以外にも公開している。講師は、広く大学図書館や専門図書館・他からも選り、テーマには病院図書室を取り巻く最新の話題を取り上げていることもあって、日赤以外の病院からも多くの参加者がある。

第1回から第10回までの研修テーマは文末の表のとおりである。これらの記録を見ると、図書室を取巻く環境の変化がわかり興味深い。発足当初は製薬会社による文献複写サービスが自粛となった時期で、文献の相互貸借などがテーマに取り上げられている。その後、担当者の資質向上や業務の合理化・見直しに関するテーマなどが取り上げられて、最近では情報通信分野の発達に伴い、図書室のIT化やIT技術の修得を目指すテーマが増えている。また、患者の権利がクローズアップされてきたことで、患者あるいは地域住民への医学情報提供・図書室公開

などのテーマもみられるようになっている。

II. 研修会準備と担当

毎年2月頃、他幹事や会員の意見を聞きながら研修テーマ・講師を検討する。その企画は3月の幹事会で決定し、講師等への交渉を重ね、6月には正式依頼文書を発行する。開催日の1ヵ月前には、会員に通知できるよう努めている。

これまでは、本社の会議室を借りて研修会を開催してきた。しかし、平成15年度から会議室の借用が有料となった。そのため第10回の研修会は、医療センターの講堂を借りて開催した。今後については、会員の希望を聞いて決定したい。

研修会開催の当初は、幹事会で企画等を行っていた。平成9年からは研修担当幹事が決まり、第4回から第9回までは木下（高山）・鳥淵（和歌山）が、第10回からは鳥淵・塚越（前橋）が担当している。しかし、開催にあたっては、本社との連絡・案内文書の発行・会計、当日の受付・進行（司会）などに、事務局を始め多くの方々にご協力をいただいている。

III. 課題

図書室の担当者は初心者から中堅、ベテランと幅広く、その知識や経験・技術など個人差が著しい。しかし、病院図書室の質の向上に必要なのは、担当者の意欲、自己研鑽と創意工夫である。与えられた知識や技能を受取るだけでは、担当者の成長に限界がある。今後は、会員それぞれが、何を学びたいのか、何を修得したいのかを明確にして、積極的に意見交換し、全体で作上げていく研修会にしていきたい。そして、研修部は、会員の意見をまとめて企画をたてるコーディネーターとして内容が偏らない工夫をすると共に、見学会や座談会も含めて、内容にバラエティーをもたせ、参加者が興味を引く研修会となるよう研鑽していきたい。

ホームページ開設について

編集部ホームページ係

: 原田 茂 (さいたま日赤)
天野いづみ (静岡日赤)

I. はじめに

日赤図書室協議会は今年(2003年)創立10周年を迎えました。これを機に、2003年8月1日、会員から要望の多かったホームページを開設致しました(図1)。

ホームページとは、言うまでもなく情報を発信する手段・ツールです。インターネットに接続されたサーバー内のホームページは世界中の人々に自由に見てもらう事ができます。また、そのページから世界中の様々なホームページにリンクを張る事もできます。そのような利点を生かして、会員への最新の情報の提供、協議会事業への協力と理解を図りたいと思います。また、会員以外の方には、協議会の事業を知って頂き、提供している情報を日頃の図書室業務に役立てて頂ければ幸いです。

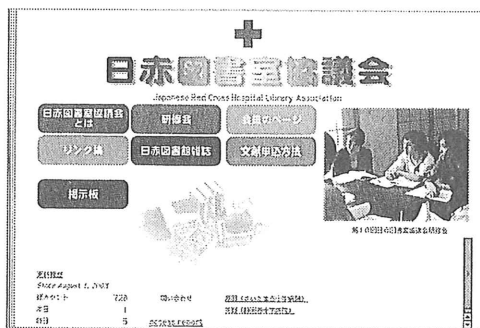


図1 日赤図書室協議会ホームページ

<http://jrch-library.peko.li/>

II. 使えるホームページをめざして

1. 【会員のページ】

このページは、ユーザー名とパスワードより保護されています。トップページは「休館情報・相互貸借休止情報」および「製本情報」を登録・閲覧できます。特に、至急の文献入手やFAXで受け取りたい場合などに活用してください。これらは皆さまに登録していただかないと無用の機能となってしまいますので、ぜひご利用ください。

また、医学雑誌総合目録も検索できます。所蔵検索を日赤目録からWebCatへと効率よく行なう事ができるようになりました。

2. 【研修会】

第9回からの研修会プログラムとスナップを載せました。研修会場の雰囲気がおわかりいただけると思います。このページは今後も継続していきたいと考えています。

3. 【掲示板】

開設から1ヶ月間のカウンタを見ると、450件ほどの閲覧があります。ほとんどの人が掲示板をのぞきにきていると思われます。掲示板は、新しい情報が少なければ次に訪れる間隔も空いてしまうでしょう。有用な情報等ありましたら、是非投稿してください。また、会員の異動、協議会からのお知らせ、会員間の案内、耳寄りな情報交換(医学情報以外でも)などにもぜひご利用下さい。

このように、日赤図書室協議会のホームページを開設しましたが、これで作業が終了したのではありません。これが出発点となります。まだまだ不完全なものですが、徐々に充実させて、会員の手によって活用できるホームページに育てていただきたいと思います。

III. 日赤図書室協議会サイトマップ

- 日赤図書室協議会とは(図2)
- 会則

特集 協議会設立10周年によせて 活動のあゆみ

会員名簿

● 研修会 (図3)

- 9回研修会プログラム
- 10回研修会プログラム

● 会員のページ (図4)

- 会員名簿
- 日赤医学雑誌目録

● リンク集

● 日赤図書館雑誌 (図5)

- 第8巻目次
- 第9巻目次
- 投稿規定

● 文献申込み方法 (図6)

● 掲示板 (図7)

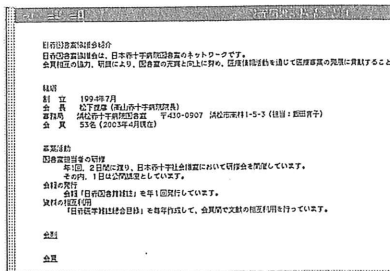


図2 日赤図書館協議会とは「会則」「会員名簿」

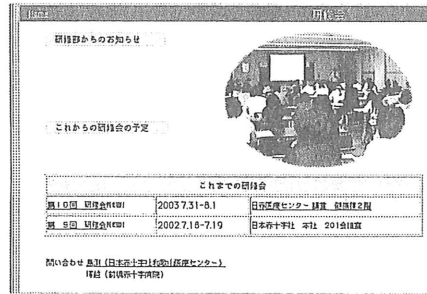


図3 「研修会」

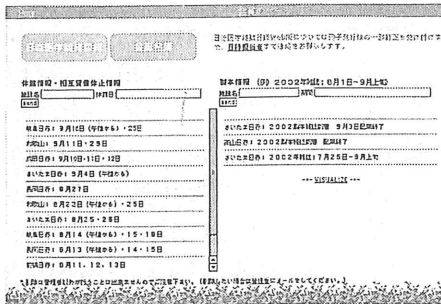


図4 会員のページ「会員名簿 (詳細)」

「日赤医学雑誌目録検索」

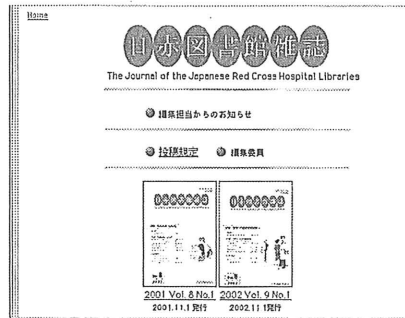


図5 「日赤図書館雑誌」

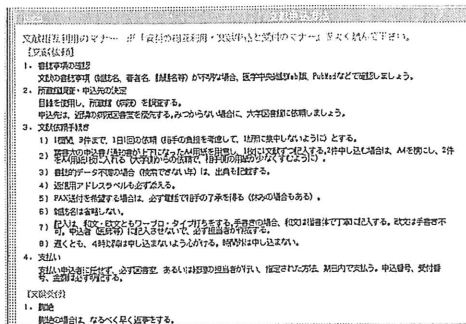


図6 「文献申込み方法」



図7 「掲示板」

庶務・会計の10年

総務部：渡辺幸代（日赤医セ）
矢口和子（葛飾日赤）

現在までの担当者は森脇（松江、平成6年～平成11年3月）、渡辺（医療セ、平成11年4月～平成13年3月）、渡辺・矢口（葛飾、平成13年4月～現在）です。

主な仕事は、文書作成と発送、会費の収支の管理です。文書は会長の命により事務局より依頼のある、幹事会の開催、幹事や協力役員の依頼、総会後には年会費請求の文書と振込み用紙を発送します。振り込まれた会費は帳簿に記録し、総会・研修会費、目録作成費、幹事会費、送料・通信費などの雑費として支出し、総会で決算報告しています。今年の総会決議により年会費の値上げが決定しましたが、次年度の予算案も作成します。またメーリングリスト（e-Group）の管理者を渡辺が担当しています。

年度単位の仕事ですが、限られた会費を無駄なく有効に利用し、最大限の活動ができるよう務めたいと思います。

日赤医学雑誌目録の作成

編集部雑誌目録係：前澤好広（長野日赤）
原田 茂（さいたま日赤）

I. 雑誌目録作成のあゆみ

日赤で最初に作られた医学雑誌目録は、

「内・外国医学雑誌総合目録」である。日本赤十字社衛生部図書館が編集し、1955年に本社が発行している。手書きの謄写版で印刷された目録で、日赤55施設で所蔵する医学雑誌688誌が収載されている（参照：日赤ライブラリアンニュース1994;1(1);9）。

日赤図書室ネットワークを結成するにあたり、所蔵雑誌の目録を作り、会員施設間で資料の相互利用をすることは当然の活動であると考えられた。平成7年に、まず「相互貸借便覧」が、次いで、「日赤現行医学雑誌所在目録1995」が作成され、会員に配布された。しかし、会員だけでなく他の日赤施設も含めた所蔵目録を作るには、本社の支援が不可欠であるため、「資料の共同利用に向けて一日赤施設の医学資料共有化のために」を、当時の事務局長であった笠原氏（名一日赤）が中心となってまとめ、本社に提出して援助を要請した。その結果、1996年に本社企画課から「日赤現行医学雑誌所在目録1996」と「利用の手引き」が発行された。翌年、本社からの依頼で、会員に目録利用についてのアンケート調査を行い、雑誌総合目録が必要とされていることが判明した。1999年に、当会が本社の事業を引き継ぐ形で「日赤医学雑誌総合目録2000」を作成し、以後毎年継続して発行している。2000年からは、日赤看護大学、短大等の所蔵雑誌も収載された。また同年、「資料の相互利用—文献申込みと受付のマナー」を配布した。2003年8月の日赤図書室協議会ホームページ開設と同時に、雑誌目録もWeb上に掲載され、会員はパスワードにより閲覧、検索ができるようになった。

II. 目録作成作業

現在の係は2名である。毎年10月中旬に、前年のデータが入ったフロッピーディスクを送り、訂正後12月中旬までに返送してもらう。

編集担当幹事が、誌名変遷や巻号照合等のチェックをした後、訂正データの入力、編集、原稿印刷をする。相互利用便覧の訂正も同時に行っている。80部程度を印刷、簡易製本し、1月中にデータ提出施設と本社に送付している。

Ⅲ. 課題

1. 編集作業を1人の幹事が担当しているため、負担が大きい。しかし技術的なレベル等の問題で、分担作業ができにくいため、1人作業を余儀なくされている。負担を軽くするため、今後は外注作業を検討する必要があると思われる。

2. 参加施設がスムーズなデータ提出をしてくれないと、編集作業が遅れてしまう。督促作業にも手間がかかっている。目録は会員にとって、非常に有益なツールであるから、データ提出期限は必ず守って、目録作業に協力していただきたい。またデータ未提出の会員施設は、相互利用の観点から、早急に自室の目録を整理して、データを提出して欲しい。

3. ホームページ係に、会員覧上に当目録を掲載、閲覧、検索するシステムを構築してもらった。今後 Web 上で、会員が随時目録を訂正したり、文献依頼ができるようなシステムとなることが期待される。

* * * * *

ネットワーク活動に参加して

旭川赤十字病院図書室
入田衛 善子

日赤ライブラリアンの会に参加しませんかと声をかけていただいてから10年になりました。文献検索にCD-ROMを導入した頃でした。その後、図書管理のコンピューター化、インターネットの利用、病院機能評価と、病院図

書室を取り巻く環境もめまぐるしく変化してきました。研修会や会報から得た知識がその対応に役立ちました。この10年は、より良い図書室にしようと内に目を向けてきましたが、これからの病院図書室は地域医療機関や患者さんへ医療情報の提供等、外に向けてのサービスに目を向ける必要がありそうです。当院はまだですが、日赤ネットワークの中にはすでに実施している施設もあり、その節には情報やアドバイスをお願いできるのではと心強く思っています。施設の規模・環境は様々だと思いますが、情報提供の場である図書室の担当者として、自己研鑽のために日赤ネットワークへの参加はとても大切なことだと思っています。これからもよろしくお願ひ致します。

* * * * *

業務の合理化について

名古屋第二赤十字病院図書室
宮岡 千代子

皆様、お元気ですか？業務に専念されている事と思います。

図書室も以前と違って、冊子体からオンラインジャーナルの移行に伴い運営上、図書室独自のものを打ち出し、存在と必要性を訴える時です。現在忙しい毎日で、そのために業務の簡素化に努めているので、その様子を紹介します。

①当館では、年一回、各科・各部署に図書・雑誌のアンケートをとります。その方法は、メーリングリストで各科部長・課長にお知らせをして、メールで返信してもらいます。②廃棄雑誌についても同様に知らせし、毎年、廃棄処分しています。以前はプリントを配布していましたが、合理的にと考え変更しました。③文献

もイントラネットで申込んでもらっています。
④図書室のホームページを作成して、イントラネットで利用案内、所蔵雑誌目録、新刊図書のお知らせ、トピックス等を定期的に更新しています。

オンラインジャーナルやイントラネットをおおいに活用して、利用者によりよい情報提供するとともに、合理化に積極的に取り組んでいます。皆様も日々努力されている事と思いますが、情報交換しながら、病院図書室の質向上の為、頑張りましょう。

* * * * *

協議会発足 10 周年を記念して

広島赤十字・原爆病院図書室
黒石 正樹

1996年4月に病歴管理係長となった私のところへ日赤ライブラリアンの会から研修会参加依頼の通知状が届きました。図書室の担当になったばかりの私は喜んで8月29・30日の第3回研修会に参加しました。会場は本社201会議室で31名の方が参加されました。自治医科大学図書館の奈良岡功氏が「病院図書室の機能と担当者の役割」という特別講演をされ、病院図書室の専門性を強く感じると同時に全国の担当者の生き生きとした活発な話し合いの姿を通して図書室にかける情熱に大変感動しました。

翌年の4月には当院にも図書係長という役職が設けられ、私が任命を受けました。その後、毎年の研修会で様々な知識と知恵を教えてくださいました。また困った時は全国の担当者からサポートしていただき、おかげさまで当院図書室も年々整備されてやっと全国レベルの病院図書室に到達しそうです。

本年、第10回日赤図書室協議会研修会が7月31日・8月1日の期間で新しい会場の日赤医療センターで開催されました。54の会員病院のなかで40名の方が参加し、外部からも38名の方が参加され、すばらしい講座・事例報告のもと活発な話し合いで大変収穫も多い充実した研修でした。昔を思い出すと男性の担当者が随分増えて心強くなりました。会員病院も増えました。会の名称も変わりました。日赤ライブラリアンニュースも本格的な雑誌「日赤図書館雑誌」の出版を始めて3年目となります。事務局・幹事さんを中心とした会員全員が団結した結果だと思えます。10年一節と申します。10回目を新たなステップにして大いなる明日に向かって、会員みんなでスクラムを組んで仲良くがんばって行きましょう。

* * * * *

カラー文献の相互貸借への導入 について

大阪赤十字病院図書係
泉谷 嗣郎

カラーコピーが市販されて久しい処であります。未だ相互貸借の原報への、カラー版の導入は見られないのが現状です。文献情報の色彩化対応は、料金体系上厳しい状況ですが、医学文献の性格上、原報に忠実でありたいのが、受け取る側の隠れた要求ではないか。ITの世界では、既に色彩化は当然として、利用されています。

そこで、カラー原報の忠実な再現については、我々の団体では如何に患者様に、正確かつ上質の情報を提供していくかが、最終目的だと思えます。将来は、精密かつ繊細な文献情報の要求

が当然となり、原典に近い色彩化の情報を提供する時代が来るものと思います。クリティカルパスを含めた、診療情報の全てに渡って EBM が唱えられている現状ですが、社会の変化で色彩化の費用も低額化へ進み、多様な文献を提供する時代到来が到来すると、相互貸借への思いを抱く処です。

* * * * *

目指すは、“パソコン バリバリ”のライブラリアン!

北見赤十字病院図書室

野村 祐子

病院図書室勤務は、早いもので丸4年となりました。現在、所属しているネットワークは、『北海道病院ライブラリー研究会』と『日赤病院図書室担当者協議会』の2団体です。平成14年度の文献複写依頼総件数は1,034件あり、そのうち551件が、『北海道病院ライブラリー研究会』への依頼でした(その他、大学図書館=296件・日赤=168件・委託=19件)。年に1度だけ道内への出張が許可されていることから、同研究会のメンバーとも顔なじみとなりました。そういったこともあり、ついつい依存してしまいます。日赤の研修会にも参加したいと思いつつも、結局、今年も行けずに終わってしまい残念です。「来年こそはっ!」と思っていますが...

当院では、2年前に『司書アシスト』を導入しました。しかし、コンピュータの扱いがマイチな私。眠らせている機能がいっぱい、自己嫌悪です。『司書アシスト』をバリバリ使いこなすことができれば、もっと楽になれるの

に!?!...とは思いつつ、最低限の機能しか使わずに一日が過ぎてしまいます。これからは、もっとパソコンスキルを磨いて、レベルアップしなくちゃ!!

8月頃から、各病棟に本棚を設置する予定でいます。“患者図書室”の第一歩として行うもので、現在、職員より寄贈を集めているところです。“患者図書室”のノウハウについて、勉強の必要性を感じています。今後、会員の皆様にアドバイスをお願いすることもあるかと思いますが、どうぞよろしくお願い致します。

* * * * *

研修会でリフレッシュ

松江赤十字病院図書室

石橋 公江

日赤図書室協議会発足10周年おめでとうございます。

私は平成13年10月より図書室勤務になり、1年10ヶ月を経たところですが、当時の私はパソコンといえばメールを少しやっただけでWord、Excel等全く知らない状態で、突然IT、電子情報の波の中に放り出され心細く不安な心境でした。その中で日赤図書室協議会を知り、日赤同士、気安くいろいろ教えていただけるのではと心強い気がしました。

日赤図書室協議会発足のきっかけは、資料の共有化を図ることであり、日赤のスケールメリットを生かすことが目的のひとつと聞いています。そのために雑誌目録、相互利用のマニュアルが作成されて大いに活用させていただいています。

また今年はホームページも開設されてより一層細やかな情報交換ができるのではと喜んでいま

す。年1回の研修会では、得るものも多く本当に良い機会を与えていただいていると思います。今後の協議会に望むこととして、研修会参加者は初級クラスからエキスパートまでそれぞれ経験が違う中でどこにポイントを置くかですが、初級クラスであれば具体的なルーチンワークや問題点を話し合う場を設けてほしいと思います。

加盟病院も年々増えて大きな組織になってきており役員の緻密な努力のおかげと、ご苦勞に感謝し敬意を表したいと思います。年1回の総会、研修会で交流を持つことにより、日赤図書館に働く者としての意識統一もより一層できているのでは・・・と今日も9階の窓から矢道湖、堀川を眺めながら感じています。

* * * * *

近況：心癒す最近出会った本

長浜赤十字病院図書室
中辻 きみ子

いつも、たくさんの本を注文されるとも素敵な先生がおられます。先日も『ねえ、ぎゅっとして』というCD ぐらいの大きさの、大人の絵本を注文されたのですが、私も読ませていただきました。子育ても一段落している私は、反省し胸が痛くなり涙してしまいました。この涙は後悔の涙なのか、本に出会った喜びの涙なのか、自分自身に問いかけているこの頃です。さっそく私も手元に置きたくて、また、娘と子育て真っ最中の3人の姪にプレゼントしようと、5冊注文してしまいました。ここまで書きながら、文才が無く内容をうまく伝えることができないのが、とても残念です。以前読まれた方も、ぜひもう一度近くの図書館等で、手に取ってみ

てください。

はやりの言葉のスローライフ、今はゆっくり歩いているつもりでも、いつの間にか、駆け足になっていませんか？貴女も。

著者：富田富士也 出版：北水です。

* * * * *

幹事を引き受けて

葛飾赤十字産院図書室
矢口 和子

東京という事だけで協力役員を引き継いで3年目になる。1年目2年目と渡辺さんにおんぶに抱っこ状態だったが、彼女は日本病院会の仕事もあり、そもいかなくなり、いつの間にか私が請け負う事になった。

私は、図書室担当といっても他の仕事もあり、限られた時間の中での協議会の仕事は、たった一枚の書類を作成するという事でさえ困難という言葉が妥当と思われるほどであった。だが、小さな単科病院の小さな図書室に大きな出来事が起ったのでした。毎日何通となく役員の方々から送付されてくるメールの数の多さに、さすがに総務も困惑し、図書室にインターネット接続という世間で当り前の事ができるようになった。遅まきながらようやく協議会運営の流れや、重要性も理解できるようになり、少しでもお手伝いできればと改めて思うところであります。

